東北建築賞研究奨励賞講評

審査委員長　浅里和茂

今年度の東北建築賞奨励賞には２件の応募があり，平成 23 年 11 月 8 日に東北支部会議室で選考会を開催した。応募論文は大沼正寛氏の「東北地方の風土醸成型まちづくりに資する建築史・保存再生・建築設計についての一連の実践的研究」と菊田貴恒氏の「ひずみ硬化セメント複合材料の引張特性に及ぼす各種因子と試験方法の影響に関する実験的研究」で，まったく異なる方向性の論文を審査することとなった。本審査に先立ち，専門の近い審査員らによる事前審査が行われ，本審査に進むことが妥当との結論を得ている。当日の出席審査員は６名，欠席者には各々に審査報告書および委任状の提出を求めており，報告書は審査の参考とした。また，審査を始める前に賞の性格についての意識統一を審査員間で行い,「奨励賞」という名称からも分かるように“将来性”を“応援する”ものとして選考にのぞむこととした。

大沼氏の論文は，地域風土と建築の関わり，設計や保存修復のあり方に関するもので，この分野での研究の幅広さを物語るものである。決して多いとはいえない東北の建築文化遺産の保全をはかる上でも，これら研究の果たす役割は大きいものと考えられる。ただし，推薦文にもあったが，個々の論文の「ある種の荒削りさ，研究としての完成度の不十分さ」については審査会でも同様に指摘された。また，業績賞のような参考論文の多さは，奨励賞としての適性についての疑問も呈された。しかしながら，これは研究の継続性や今後の発展について担保するものであることも事実である。

菊田氏の論文は，合成繊維や鋼繊維を混入して作られる「ひずみ硬化セメント複合材料」に関するもので，今後注目される材料である。これまで繊維混入セメントはひび割れ抑制効果に注目されていたが，応募論文ではその優れた靭性能を構造材料として適用としようとするための，基本的な材料性能を明らかにしようとするものである。そもそも脆性材料であるモルタルやコンクリートでは引張性能に期待しないため，引張試験方法や評価方法が定まっていない。そこでいくつかの試験方法，試験体形状による実験により明らかにしようと試みている。ただし，試験数など完成度に対しての意見もがあったが，ひるがえせば将来性に期待できると判断した。

以上のような議論の結果，審査員会は応募２件が奨励賞に該当することを出席者全員の合意により決定した。